



TITLE:

表紙・口絵写真・資料・報告会プログラム・参加者一覧・山本一清先生略歴・目次・あとがき

AUTHOR(S):

CITATION:

表紙・口絵写真・資料・報告会プログラム・参加者一覧・山本一清先生略歴・目次・あとがき. 第二回天文台アーカイブプロジェクト報告会集録 2012

ISSUE DATE:

2012-01

URL:

<http://hdl.handle.net/2433/158300>

RIGHT:

—研究資源アーカイブ映像ステーションイベント—

第二回天文台アーカイブプロジェクト報告会集録

<山本天文台特集>



2011 年 7 月 28 日 京都大学映像ステーション

京都大学総合博物館・研究資源アーカイブ＋理学研究科附属天文台＋
理学研究科宇宙物理学教室 共同プロジェクト

人

大坂の医者寺島良安は師の教え「医を業としようとするならば、上は天文を知り、下は地理を知り、中は人事を知らねばならない」により、明の王圻が著した図絵入り百科全書『三才図会』百六卷にならって『和漢三才図会』百五卷を正徳二年（1712）出版した。ディドロの『百科全書』（1751－1757）と対比される比較文化史的価値の高い当時のベストセラーである。『和漢三才図会』の天部をもじった劇作『和談三細図会 天部初編』が天保十三年（1842）に錦葉老人により出版されている。このパロディー本は山本先生が愛された暦書・和算の書棚にあり、江戸時代の文人の遊び心に共感しておられたことを感じる。三才は天地人也。天は山本天文台の回転ドーム、地は地球儀と望遠鏡模型群、人は京大天文台アーカイブプロジェクト。



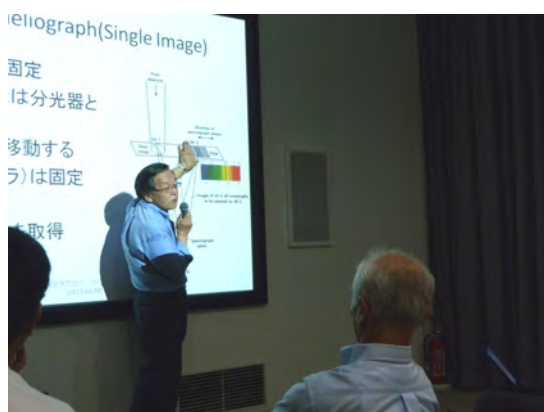
資料寄贈者山本章氏（中央）、坂井義人氏紹介（右）



昭和3年発行一万分の一京都市地図を見る



文化期の大星図を見る



ヘリオグラフ乾板を用いた研究について
講演する北井氏



山本一清先生の秘話を紹介する坂井氏



挨拶する山本氏

映像ステーションにおける報告会のようす

報告会プログラム

<山本天文台資料保管室見学会>

7月28日 11時より 京都大学北部総合教育研究棟（益川記念館）205号室

<報告会>

7月28日 13時半より 京都大学映像ステーションにて

あいさつ 柴田一成

寄贈者紹介 山本章氏、坂井義人氏

参加者紹介

経過報告 富田良雄

今後の調査研究課題

山本博士資料の特徴について 五島敏芳

乾板類 ヘリオグラフ乾板 北井礼三郎

直接乾板、対物プリズム乾板 前原裕之

カルバー46cm 反射望遠鏡 坂井義人

観測用器具類

気象観測機器 武田榮夫

本・雑誌・資料

東亜天文学会資料 大西道一

その他 国友関係など

調査研究の体制

カルバー鏡の動態保存、山本博士書斎復元

参加者（敬称略）

山本天文台：山本章 小川村：坂井義人

総合博物館：五島敏芳、角井宏司、池田素子、山下俊介

花山天文台：柴田一成、北井礼三郎、野上大作、前原裕之

宇宙物理学教室：富田良雄 国立天文台：中桐正夫、田島俊之

同志社大学：宮島一彦 京都学園大学：岩崎恭輔

防災科学技術研究所：根岸弘明、井口隆、堀田弥生、鈴木比奈子

東亜天文学会：大西道一、武田榮夫、佐竹真彰、豆田勝彦

月光天文台地学資料館：五味政美

久保田諄（見学会のみ）

山本一清先生の略歴

- 1889年5月27日 滋賀県栗太郡上田上村大字桐生 289 番地で生れる。
- 1907年3月 滋賀県立膳所中学校卒業、同9月第三高等学校第二部工科入学。
- 1908年6月23日 京都市の平安教会で故西尾幸太郎牧師から洗礼をうける。
- 1910年7月 第三高等学校卒業。9月京都帝国大学理工科大学物理学科入学。
- 1913年7月13日 京都帝国大学卒業、同大学院入学。同12月14日結婚。
- 1914年1月 臨時緯度観測所嘱託、同5月水沢行。1916年5月京大に帰る。
- 1914年4月24日 京都帝国大学理工科大学助手。翌年4月24日京大理科大学講師。
- 1916年から1922年まで毎夏、測地学委員会の委嘱で重力測定（約280地点）。
- 1918年6月9日 鳥島で日食観測。同10月19日京都帝国大学理科大学助教授。
- 1920年9月1日 古川龍城氏らと天文同好会（後の東亜天文学会）を創立。
- 1922年9月11日 文部省在外研究員として米英独仏（おもに米）留学出発。
- 1925年3月3日 帰国。同4月18日京都帝国大学教授。同7月20日理学博士。
- 1927年6月 奉天でポン・キンネケ彗星観測、同11月10日台中で彗星太陽面通過を観測。同12月英国 Goodacre 氏から 46cm 反射赤道儀を譲り受ける。
- 1928年12月末 台南で山崎・フォーブス彗星と画架座新星を観測。
- 1929年5月9日 スマトラで日食観測。6月ジャワで太平洋学術会議参列。
- 1933年6月 カナダで第5回太平洋学術会議に参列、のち米国を視察。
- 1934年12月 台北市で日本学術協会第10回総会に参列。
- 1935年4月 台中観測所の震災害を調査。同10月朝鮮、満州、華北を視察。
- 1935年7月 国際天文同盟黄道光委員会の初代委員長に推薦される。
- 1936年6月19日 オムスク（ソ連）で日食を観測。1937年3月1日勲三等。
- 1937年6月8日 ペルーで日食観測。同年広島県福山市外に黄道光観測所設立。
- 1938年5月30日 高等官一等、従四位。5月31日依願退職。6月13日正四位。
8月ストックホルムで国際天文同盟総会に出席、第2期黄道光委員長に推される。9月22日スウェーデン国天文学名譽会員に推挙される。
- 1939年3月から6月まで満州と華北に遊ぶ。
- 1940年10月 田上天文台建設に着手、11月観測開始。1942年5月25日落成式。
- 1941年9月21日 台湾北部の富貴角で日食を観測。
- 1946年4月10日 衆議院議員総選挙に社会党公認で立候補35人中10位で落選。
- 1947年4月5日 滋賀県知事選挙に社会党公認で立候補して落選。
- 1948年8月25日 上田上村長に無投票当選、9月1日就任。翌年10月28日辞任。
- 1955年1月 創立者の名に因み、山本天文台と改名。

1958 年 4 月 19 日 鹿児島県指宿市で日食を観測。

1959 年 1 月 16 日 10 時 13 分滋賀県草津市大路井町 420 番地で病気のため永眠。

(『天界』407 号 1959 年に掲載された略歴を引用。先生の詳細な年譜については今後日誌、手紙等の資料の調査の進行とともに加筆・充実してゆく予定である。)



山本一清先生ご遺愛の文鎮：懷中時計を弄ぶ童子

56×28×59mm

目 次

口絵写真・資料	
報告会プログラム	
山本一清先生略歴	
山本一清先生資料の概要	富田良雄・・・1
太陽全面 CaII 線スペクトロヘリオグラム(1926－1972)	北井礼三郎・・・4
カルバー46cm 望遠鏡関連資料と	
山本天文台に保管されていた写真乾板の状況	前原裕之・・・9
山本一清博士と遺愛カルバー46cm 反射望遠鏡	坂井義人・・・11
山本天文台の映像資料と学術活動における映像利用について	山下俊介・・・18
山本天文台の気象測器	武田榮夫・・・23
山本天文台に保存されていた望遠鏡の模型	大西道一・・・25
天文歌考	富田良雄・・・27
あとがき	・・・32



開会挨拶をする柴田天文台長

あとがき

歴史上の人物の評伝は、残された同時代の一次資料と後世の二次資料・伝説から構築される。時をはるかにさかのぼる古代の人物となると、一次資料はほとんど残っていないのが一般的であろう。卑弥呼しかり、聖徳太子しかりである。かろうじて伝えられた資料も時の権力による取捨選択を経て著しく改変させられていることがある。近代以降になればその事情は一変するかというと、意外や一次資料は関係者の善意により整理され、都合のよいものだけが残されるのが普通であって、その人物の人生の真実を語るものすべてが残されることは少ない。一次資料が豊富に残され数次にわたり全集が出版されてきた宮沢賢治でさえも、その短い人生の要のできごとについて隠されている事実があるという。作品の詩文そのものからの解明が進みつつある。このたび京都大学に寄贈された膨大な山本資料は、山本先生の人生そのもの、その頭脳の全活動を反映するものである。また直接先生の薫陶を受けられた人も健在であり、今回そうした話も語っていただき一部を集録に掲載できた。

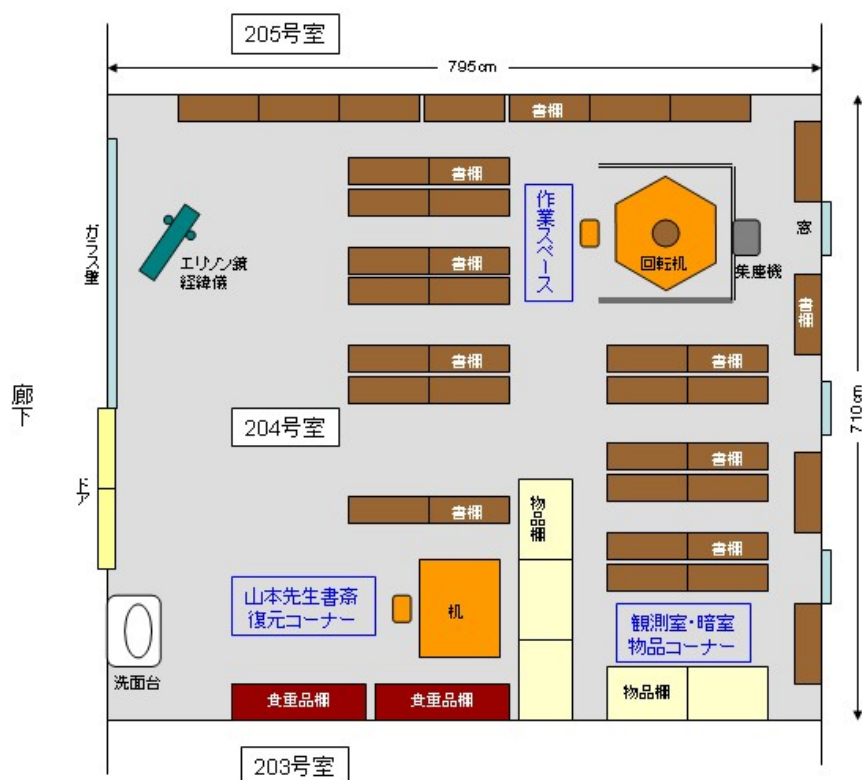
日本天文学会の定款に特別会員、通常会員、賛助会員の規定がある。特別会員は研究者対象であり、通常会員は天文愛好家が対象となっている。かつては会員数のうえでは圧倒的に通常会員のほうが多数を占めていた。公式の学会においてこうした一般人の正式加入を認めている学会はめずらしいのではないだろうか。その定款の成立背景には、日本の天文愛好家を育てた山本先生の影響が大きいと考えられる。

さて、高い目線からの表向き評価を別にして、山本資料はそのひとつひとつが実に興味深いのである。保管室にはいると向いの机の横においてある三球儀が目に入る。これは事前調査のおりには輸入品だと判断していたのだが、実は明治時代に山口県のまったくの素人の方が、年月をかけて製作し持ち込まれたものであることが判ってきた。数多くのギヤを使用して太陽の周りの地球と月の運行を表現している。製作者はなんのためにこの三球儀を作ろうとしたのだろうか。机の抽斗のひとつに府県毎に分類整理されてびっしりと詰め込まれた名刺、宛名カードがある。これは東亜天文学会の会員リストであり、かつ先生の交友関係を語る貴重な資料でもある。国内・海外の絵ハガキが和本を収納する俵匳蓋箱に整然と積まれている。また記録魔であった先生が生涯撮影された写真のネガ、写真アルバム、それを使った著作物と原稿がそっくりそのまま残っている。極めつけは兵庫県の旧家からあずかされたそのご先祖が文化年間に制作されたというたたみ6畳分くらいの大きさがある星図と関連資料。これは先生の書斎とされていた第一研究室の天井の吊り棚に「非常持ち出し」という札のついた風呂敷に包まれて保管されていた。地図マニアでもあったのだろう、戦前の京都、大阪、東京、朝鮮各地の一万分の一地形図が保存のよい状態で残されている。倉敷の大原美術館の収蔵美術品の特製大型本もある。山本天文台に設置されていた気象観測機器類、これについては武田榮夫氏に記事を執筆していただいた。また、世界各地の天文台の望遠鏡等の木製ミニチュア模型もある、これは大西道一氏に記事を執

筆していただいた。中国、朝鮮の天文図拓本については、宇宙物理学教室図書室所蔵の2本とあわせて、宮島氏とその研究グループの方々に調査していただいた。昭和18年ころの岡山長島愛生園ハンセン病療養所慰問と長島天文台建設活動など、ほかにも取り上げればきりが無い。まだ資料本体である600箱をこえる書類・書籍のほうにはほとんど手がついていない段階でこの状況であるから、今後の調査が非常に興味深いものとなるのは必至である。

なお付け加えておくと、来春京大総合博物館にて開催予定の「京大日食展」に未整理の状態ではあるが先生が観測に携われたスマトラ日食、北海道日食、ペルー日食等の観測データや暦学関係の漢籍・和本を出展する予定である。日食展を見学される方々に京大にこんな興味深い資料が保管されているのかと認識を新たにしてもらえればと考えている。

調査はまだはじまったばかりである。現在、益川記念館にもう一室(204号)プロジェクト室が確保できたので、整理棚や環境の整備をすすめているところである。準備が整えば、多方面、多くの方々の協力を得ながら、まずは資料目録の製作からはじめ、最終的には「山本一清伝」の共同執筆をめざすことになるだろう。他には無い規模の資料をもとに、これまで評伝が書かれてこなかった先生の業績の総合的再評価を行えればと考えている。



北部総合教育研究棟2階新資料室(204)資料配置案

(追記) 山本章氏からの連絡では、山本天文台建物および本宅は10月上旬に取り壊されたとのことである。



文鎮代わりの香立

38×25×13mm、青銅製